



岡崎市特殊教育推進協議会・昭和57年3月13日発行



教育の原点

特殊教育部長

渡辺尚三

一昨年の二月末に岡崎盲学校のK先生と東京へ研修に出かけた。帰りは私が一緒することになった。青山から地下鉄を乗り継いで東京駅へ、階段の昇り降りに気を使う私に、「先生の腕に触っておればわかりますよ。」と言われて汗をかいた。道案内をすることにのみ夢中になっている私に、声をかけてくださったK先生の暖い気持が、今も私の左手に軽く触れておられた感触と共に残っている。

私も初めてのことでなので気を使ったが、K先生の方がはるかに不安であったと思われる。全盲の先生は、混雑する地下鉄の中、階段や歩道を歩くのに、慣れない私にすべてを任せておられたからである。そのことに気がついたのは、帰りの新幹線の座席に坐ってほっとして先生と向い合った時であった。

特殊学級の子たちの明るい笑顔は、家庭では両親や家族に、学級では先生や友達に全生命を任せているから生まれてくるのではなからうか。

前号の「かいほつ」に掲載されていた「先生、だからあんまり怒っちゃいかんよ。」という生徒の声は、その訴えと思われる。すべてを任せ、心から信頼している先生に、なぜ叱られるのかわからない時は何より悲しいことであろう。

教育は信頼と愛情を基盤としなければ成立しないと言われる。心身に障害を持つ子たちの親や教師によせる信頼は深く、その生命にかかわるものである。この信頼にこたえる道こそ私たちの進むべき方向を示している。教育の原点が障害児の教育にあることも当然の帰結として納得されよう。

「ぼく、ひとりで買い物できたよ」

市内特
殊学級 **全員が買い物実習**

A子の買い物実習

緑丘小 渡辺勝英
藪田篤夫
山本明美

一年生のA子のIQは80、話し言葉にやや不明瞭な発音があり、聞き取りにくいことがよくある。10ぐらいの数唱は唱えられるが、物を数えて、その大小を決める等の数の使い方になると、8や9のあたりでつまずく



のである。また、A子には、ほとんど買い物経験がなく、いろいろな種類のお金を見ても、それでもどどの程度の品物が買えるかという価値そのものはほとんどわかっていなかった。金銭に関してA子は、きわめて貧弱な経験しか持っていないのである。

A子には積極的に次のような手だてを考えて買い物実習をさせたのである。

お金の型わくはめ

数能力の向上を

この教具は、写真のように10円から100円までの金額に合わせて、10円玉、50円玉、100円玉がちょうどあてはまる大きさのわくに切り抜いたものである。つまり、お金の大小を型わくの長さで示してあり、お金の大きさを量感としてとらえやすくしてある。この教具を使ったお金の操作活動を繰り返す。

返し実施させて数能力の向上を図った。

・ **品物一つの買い物実習**
この場合、お金の種類一つと品物も一つである。お金を出した代わりに品物を受け取るという交換の楽しみをわからせるものである。

・ **100円で買い物実習**
10円玉10個と50円玉2個と100円玉1個を入れた財布を持たせて、100円以内で自分の好きな品物を買わせる。

A子は現在、100円程度の品物を自分で選んできて、それに応じたお金を何とか払うことができるようになってきた。このことは、買い物実習という生きた体験の場が幾度か用意されたからである。

宮嶋先生、ありがとう

今回、岡崎市内小中学校の特殊学級全員による買い物実習が実現した。これは、愛教大附属中講師の宮嶋幸代さんと南ロータリーのご協力によって障害者のお役にたてて下さいと寄贈された。有効な使用方法を世話係で検討し、児童・生徒とも相談した結果、買い物学習が実現した。厚くお礼を申し上げます。

「K男 もどってこい。」
聞いたり、かわいらしい動きを目にする、みんなといっしょに大きな声で笑いこぼしている。私が子供たちをひきつけて歩いていると、よく他の先生方から「親子みたいだね。」と言われることがある。そんな時口では否定しているが心の中でニヤニヤしてしまう。

「お山の大将」
ある子には 羽根小
「よくやった、
えらいね。」とだきすくめてほめていたと思うと、「なにをしてるんだ。」そんなことをしているのか。」と大声がとんでいく。猿山のボス猿のごとく お山の大将然とふるまっている。しかしそんな中に、子供の冗談を

鳥井裕之
大声で怒鳴っている私に対してそんな事を気にせず「トリ先生」と寄って来てくれることをうれしく、さらにはありがたくも思っている。

昭和五十六年度

市内特殊学級の現状

・小学校の部

精神薄弱学級	十九学級	八一名
情緒障害	八学級	三三名
身体虚弱	一学級	五名
難聴学級	一学級	三名

・中学校の部

精神薄弱学級	十一学級	七三名
情緒障害	三学級	一四名
身体虚弱	一学級	四名
院内学級	一学級	一名
計	一六学級	九二名

計 三十学級 三三一名



学げい会

男川小 五年

わたしは、体いくかんにあがる時どつきん、どつきんしました。ほうそうのおねえさんが、「かえるとうし。」といったので前よりどきどきするのがよくわかりました。

おわりに名前をいって出るけどはづかしいなとおもいました。

草花を育てることは、子供を育てることと非常によく似ている面がある。草花は生きものだから、手入れの仕方が悪ければ正直にそう反応する。相手が人間でないだけに、反応はより素直であると言ええる。

草花が、別にありがとうとお礼を言ってくれる訳でもないのに、根気よく将来を楽しみに、花好きは、こつこつ手入する。

焦って見たとて、咲く時期が来なければ、花は咲かない。今日、肥えをたっぷりやったからとて、明日、倍の大きさに育つものでもない。むやみに、肥料や水をやり過ぎれば、根腐れを

わたしと安井くんとでました。とつてもはずかしくてかおがばかりません。いっしょうけんめいはづかしいのをがまんしていいかおをしたので、まくがしま

楽しい。 葵中 三年

サツカーがやれる。 ボールけつたら、おもしろい。 太陽のまわりへとんじやう。 強くけとばして、足いたくなる。 みんなが わらけちやう。 へんなどこ行っちやうと

「とでもしようずだったよ。」と ほめてくれてうれしかったです。 「もう!!」っておこる。 ぼく、先生のうしろへ かくれちやう。

おこすのが、関の山だ。小枝や わき芽も適切に摘んでやらなければ、美しい大きな花は咲かない。

毎日毎日、こつこつとさりげなく、それでいてこまやかな愛情をこめて、根気よく花の咲くのを楽しみに世話をする。義務感や世間体のためではない。いわば、無償の営みである。そしてそれが、無上の楽しみでもある。

草花を育てる心

愛知県立安城養護学校長

榊原美文

やり、芽が出て来る時をわくわくしながら待つ心情こそ、いつの時代にあっても、人間が、心やさしく、人間らしい生活を営むために不可欠ではないか。

岡崎小 四年



評 おしよさん が、おにばん を豆つぶぐら いにして、パ クリと食べま した。表情が よくていま す。

矢作北中 二年



評 髪一本までも 大切にかいて いる、ていね いな作品です。 たくましく描 けています。

元気で明るい三名の子

福岡小 精薄学級

・上着の下から腹出して 命令口調ではりきって、 落ち着きなくて、世話好きで、 床の乾ふき大好きよ。

・可愛い顔して身ぎれいで、 素直で純真、甘えんぼ、 作り言葉で本を読む

一日も休まず絵日記書く。 ・「コンニャクマン」と 言われる子、

口をゆがめて、つばためて、 たどたどしくて幼児語を 得意は、書くこと、描くこと。 みんな元気で明るい子



明るくのびのびと

障がい児特殊教育の歩み(四)

梅園小の林間学寮 規則正しい日課で習慣形成

私が担任であった頃

甲斐礼子

昭和二十五年七月三十一日、(月)昨日までの雨もからりと晴れて、暑い夏の一日が約束されたような朝である。

八時、六年生の児童二十名が荷車へ天幕、むしろ、バケツなど、道具を山と積んで学校を出発した。その後から養護学級(一・二年)児童五十名が、大風呂敷(午睡用具)を持った父兄達



戦後の部

と一緒に、学校の東方五百メートルぐらいの所にある山林(現在甲山中学校北の住宅地)へと向かう。松林の間から見える天幕の白さ……入口に「林間学寮梅園小学校」と大書された立札が見え始めると、子供たちの瞳は輝いた。

夏期林間学寮の試み

一日の生活は朝の健康観察に始まり絵日記、日誌、プリントによる学習、動植物の採集、まき拾い、自由遊びと木登り、川遊びなどを組み合わせて、自然の中で新鮮な空気と日光に親しみながら、児童中心の日課ですすめられた。昼食には栄養の供給(当時は食生活が恵かった)と偏食の矯正をはかり、学校医山中先生の指導によって脂肪分や蛋白質を多くとるよ

夏期林間学寮

うに、てんぷら、コ

ロッケ、カツなど給食調理員の方たちが学校で作っては、汗を流しながら山まで運んでくれた。午後からは休養をとるため午睡の時間がもうけられ、その後おやつとくつろぎの時間がある。学校の先生方に紙芝居やお話をしてもらったり、PTAの方、各種団体の方たちの慰問を受けたりした。校医さんが訪れて検診もしてもらった。

こうして、多くの人々の援助により、夏休み中二週間にわたる自然の中での規則正しい生活を過ごすことができた。

養護学級の歩み

昭和十年全校の身体虚弱児を対象に校医さんの協力を得て健康相談が開かれ、昭和十五年頃より養護学級特設の気運が見え始め、昭和十七年度初めて養護学級が特設された。十八年度から一・二年で二学級でき、年度によっては三学級編成もされた。担任していた最後の三十四・五年頃より身体薄弱の学級から精神薄弱の学級へと変っていった。

始め担任していた昭和二十五年頃はまだ食糧事情が悪く、栄養不良による発育の遅れや、病弱の児童が多かった。そこで、



教育相談 — 婦人会館にて

学級編成の方針は、(一)発育不良児 (二)虚弱体質児 (三)ツベリクリン陽転児と陽性児のうち養護を必要とする児童ということであった。

バター・にぼしで栄養補給

日課も規則正しい生活習慣の形成に重点をおき、適正な運動、休養、栄養の補給につとめた。例えば朝の観察記録は個人別の表を作成し、検温、散歩、戸外学習、特に栄養剤の服用、バター(特別)にぼし等の栄養補給

もした。毎日の検温により陽転児の発病を事前に発見することもできた。(元梅園小学校教諭)

授業研究に就学・進路指導に活発な活動を展開

昭和五十六年度の現職教育・特推協・就学指導の活動は活発で年間四十回をこしていた。

昭和五十六年度就学指導結果調査数 就学児 五二名

在学児 一〇名

障害別人数 — 就学児 —

視覚障害 一名

聴覚障害 一名

運動障害 一〇名

病弱 三名

知能障害 一名

情緒障害(自閉) 一三名

〃 (除自閉) 五名

言語障害 三名

その他(軽度) 五名

— 在学児 —

聴覚障害 三名

知能障害 三名

情緒障害(自閉) 三名

情緒障害 一名

就学指導

- 五月 就学指導説明会
- 六月 養護学校見学会
- 七月 第一次教育相談
- 九月 特殊学級見学
- 十月 就学指導説明会
- 十一月 第二次教育相談
- 十二月 就学指導委員会